

竹島記す古地図 発信

東京の研究所がDB化

領土問題などを研究する日本国際問題研究所（東京）が27日、竹島（隱岐の島町）や北方領土の日本の領有権を示す江戸時代の水戸藩の地理学者・長久保赤水（1717～1801年）の地図のデータベース化を始めた。外務省の領土問題研究に関する補助金事業で、大半が茨城県高萩市の市歴史民俗資料館の収蔵品。古地図をホームページから海外に発信したり、研究者が閲覧したりできるようになる。

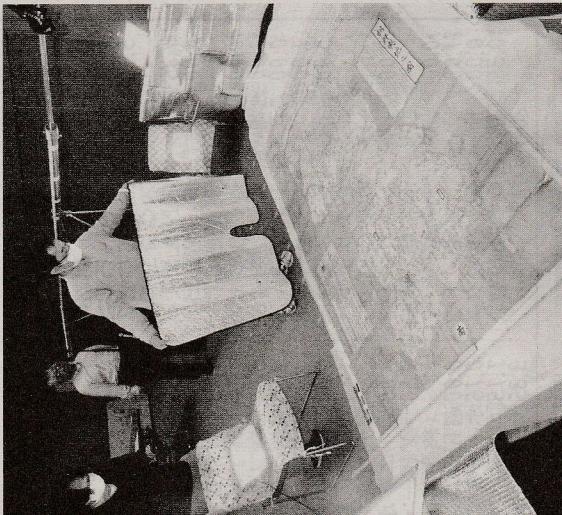
(安恒勇氣)

長久保赤水「日本圖」など22点

外務省は2017年度に領土問題研究を対象とした補助金を創設。同研究所は昨年度から論文や書物などの収集を始め、今年度は一次資料を充実させようと、古地図の調査に乗り出した。この日、高萩市の市歴史民俗資料館では、松江市の映像会社のスタッフが、特殊な装置を用いながら、地図の写真を撮影した。

対象の地図22点のうち20点は、赤水の子孫が同資料館に寄贈したもの。14点には、竹島を日本領として描いた最古の地図とされる

作業を行う地図の撮影スタッフたち（茨城県高萩市の市歴中民俗資料館で）



しい島根大の船杉力修准教授は「朝鮮側が竹島の存在を知らなかつた可能性が高いくことを示す資料」とする。朝鮮国図は、1797年以前に幕臣が持つ地図を赤水が写したとされ、地図に記載された地名などから1684～1767年の朝鮮半島の景観を示すという。同じく未公開の「蝦夷圖」は、幕臣・最上徳内らによる調査結果を反映した「蝦夷輿地全図」を写したもので、1788～92年に作成されたとみられる。北方島とウルツア島の形がほぼ正確に記され、カムチャッカ半島の手前の島まで松前藩領とされている。

同研究所の斎藤康平特別研究員は、「地図は、赤水が竹島や北方領土を日本領だと認識していたことを示す貴重な資料」とする。外務省政策企画室も「領有権の主張にはしつかりとした論拠が必要。資料の掘り起しこじがさらに進んでほしい」と期待する。